

●春日部市民文化講座（第24回） 「千利休の妻宗恩と佗茶」

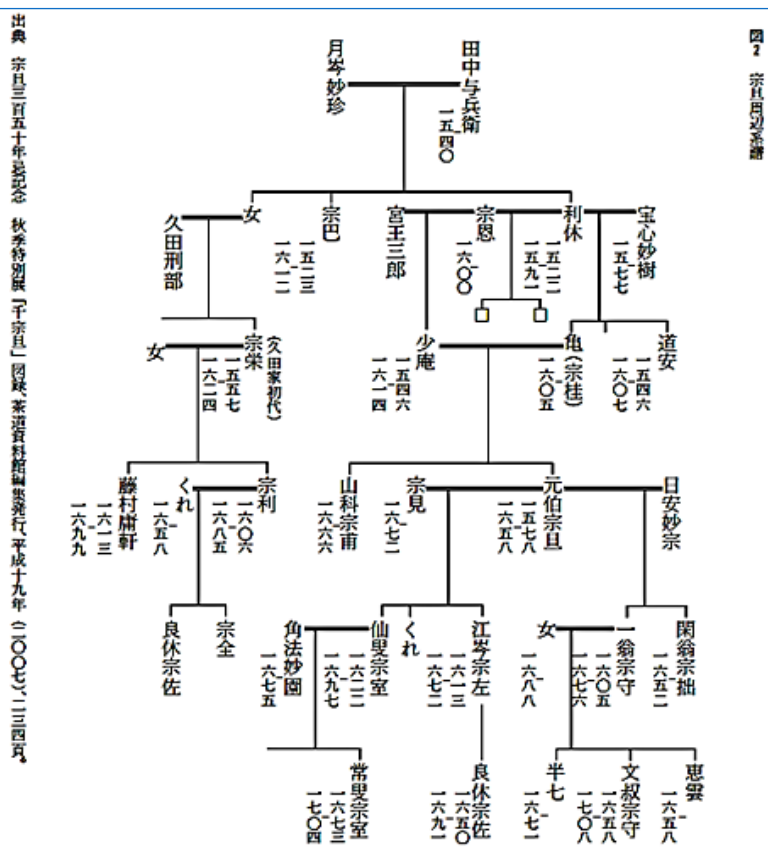
◆日時：2017年11月29日(水) 11時（ぽぽら春日部4階会議室）～12時

■消された史実から

今日のテーマは「千利休の妻宗恩と佗茶」ということで、何だこれはというテーマになっていますけれど、千利休の奥様にしても、千利休を中心とした人間関係にはしても歴史の中で完全に意図的に消されているところがあります。それは何故かと言いますと、当時のイエズス会の宣教師やキリスト教会と関わりのあるところは完全に消されているからです。ですから、第一資料として日本にある文章はほとんどありません。第一資料としてあるとすれば、宣教師達によってポルトガル語かラテン語で書かれ、イエズス会を通じてバチカンに送られ保管されている横文字の文章しか残っていないということをご理解いただきたいと思います。最近になって茶の湯とキリスト教との関係がさまざまな所で言われるようになって、武者小路千家のお家元は「キリスト教との関わりなくしては佗茶について理解できない」と繰り返して仰っています。表千家でも、千利休没後400年記念の時に京都国立博物館で利休所持と伝えられている『山姥文庫』を出品したのです。この文箱に描かれた絵は、千利休がキリスト教の教理である「original sin(原罪)」を知っていたことの隠しようもない証拠なのですね。



【利休所持：山姥文庫】



■後妻であった宗恩

千利休が最初に結婚した本妻の宝心妙樹という人とは上手くいっていなかったということは、研究者の間では共通しています。そして今日のテーマである宗恩という人は後妻です。茶の湯の立ち居振る舞いの中には能の立ち居振る舞いが入っています。千利休の時代には幸若舞というのが流行っていたのです。その能のお師匠さんのお嫁さんが宗恩という人です。系譜では、宮王三郎と書かれている人が能のお師匠さんですね。その宗恩には連れ子がいたのです。能楽者の宮王三郎との間にできた子供が少庵なのです。千家を正に継いだのはなんと、血族者では無くて後妻の子供なのです。

■名を変えていく利休

千利休にはいろいろな名前があって、幼名が与四郎、康隆、出家した法号が宗易（そうえき）、抛筌斎（ほうせんさい）というのが有名ですね。宗易や抛筌斎を名乗っていた頃は、まだ武器商人だったのです。天正13年

（1585年）に禁中茶会にあたって町人の身分では参内できないために正親町天皇から与えられた居士号が利休なのですね。

■千家の系譜図を読む

この系譜を見ていくとすぐ下のところに実子で「お亀(おちよう)」という名前が見えます。「お亀」が宗恩の連れ子で宮王三郎の子どもで利休の養子になった「少庵(しょうあん)」と結婚しているのです。そして少庵とお亀の間に生まれた子どもが「宗旦(そうたん)」なのです。ここで初めて三千家、表千家、裏千家、武者小路千家の先祖がかつちりと固まる訳です。でも不思議ですよ、千利休の実子でない少庵が千利休の佗茶を継いだ訳です。実子で「道安(どうあん)」という人がいるのですが、この人は主流から離れていき、気の毒な生涯を送ったと茶の湯の世界では言われています。

■千少庵、そして宗旦、三千家へ

少庵とお亀との間に生まれた宗旦、三代目になって千利休の血が繋がるのです。そして宗旦の三男の江岑宗左が表千家、宗旦の四男の仙叟宗室が裏千家、宗旦の次男の一翁宗守が武者小路千家をそれぞれ四代目として開くことになるのです。その宗旦は、10 歳の時に利休の勧めで大徳寺に預けられていたため、利休切腹の影響はなかったのですが、少庵が戻った時に還俗します。宗旦は喝食(かつじき、禅寺で齋食(精進料理)を行う時に衆僧に食事の順序などを大声で唱える者)として預けられたので、**喝食宗旦**と呼ばれています。宗旦にとっても、千家が取りつぶされて家族が離散してしまうという時代があった訳ですよ。少庵が京都に戻ると、今の徳大寺の門前に利休屋敷で佗茶の修行を始める訳です。そこへ宗旦を呼び寄せるのです。この頃、蒲生氏郷は伏見で病床にあったのですが、少庵は秀吉の勘気を解いてもらい、会津から京に戻れた札に氏郷を見舞います。そして高山右近に出会い、少庵宅に招いて茶会を開きます。その時に宗旦も同席しています。こうした流れで「江岑夏書」に書かれる利休七哲の順番が決められたと思います。

■千宗恩と千利休とキリスト教

千家の系譜図を見て、ぼくが強調したかったのは、**千宗恩**という人が**キリスト教徒**だったということです。千宗恩という人の心にキリスト教が入ったのは、宮王三郎というご主人がお亡くなりになって、京都で暮らしていた頃に宣教師と出会っているような気配がします。その確証となる日本側の資料はないのですが、何となく読み取れるものがルイスフロイスの『日本史』で、その中の宣教師の動きを見ていくとそうではないかと分かっていくのです。ですから、宗恩はキリスト教徒だと言えますかな・ずるいのですが確たる証拠がないので仕方がないのですよ。**宗恩がキリスト教徒だったとしたら、その子供の少庵は当然お母さんの影響を受けています。**そうすると、千利休も“オリジナル・シン”が描かれた「山姥文庫」を持っていたのですから、キリスト教を知っていたと言えますね。千利休がキリスト教を直接知ったのは、師である武野紹鷗の弟子で同門の茶人で納屋衆の**日比屋了慶**の影響です。この辺は歴史的に確かですね。日比屋了慶の家は、堺における教会のように宣教師が出入りし、あのフランシスコ・ザビエルも宿泊していますし、迫害時代には殉教者も起こされているような家ですから、キリスト教で凝り固まった家と言えます。家も非常に近くだったのですが、この関係の記録が徳川の時代になってから完全に消されているのです。そして、日比屋了慶の家は没落していますが、原罪は堺市によってザビエル公園として市の観光資源として残っています。堺市って凄いですね。そればかりではなく、堺市が凄いのは丁寧な発掘です。

■利休のお亀への辞世

これは「利休めはとかく果報のものぞかし管丞相になるとおもへば」という狂歌ですが、利休が蟄居を命じられて淀川を下る舟の上で書いたと言われていますが、管丞相とは無罪の罪で流された菅原道真の事なのですが、この歌には恨み辛みは感じられません。自分は無罪なのに、菅原道真のようになってんだよなあ・という感じで、お亀(おちょう)に書いているのです。封に「お亀に渡し候へ」と書き、「お亀に思い置く」「利休」と書いているのです。これがあるお寺さんから見つかりました。利休さんの真筆です。



■千利休の佗茶

千利休の佗茶は、こうして少庵に受け継がれ、宗旦に受け継がれ、そして江岑宗左等の四代目に受け継がれて来ました。ただ、江戸時代になってから、徳川幕府の力の中で佗茶というのは相当、良い意味においても悪い意味においても変質してきていると思います。特に、千家十職と言われる特別な茶道具の作り手が決められるのですね。それによって利休の佗茶が変わってきただろうと思うし、一番違ったのは家元制度ができたことです。何故ぼくがそんなことを考えるようになったのかというと、高山右近を通して千利休と佗茶について調べ関わっていく中で、表千家の同門としていろいろと考えさせられることがたくさんあるのです。利休さんが、「待庵」を造り、1 畳半の茶室を造り、その 1 畳半で切腹したと思います。ですから、私たちが関心を持っている佗茶って生死に関係ある訳です。ですから、『一期一会』だって、『一期』は死でしょう。『一会』は会うこと、出会いでしょう。命というのは出会うことによって生じる訳ですからね。ぼく達も死ぬ時に自分自身と仲良くして、自分と出会って死ななかつたら死ぬに死ねないと思うよ。皆さんにこの意味が分かるかなあ・？ というのは、お茶の美味しい一服は、自分が食べて美味しいと感じ、自分が飲んでこれは最高だと感じるおもてなし、**自分に対するおもてなしが利休の佗茶の極めなのです。**

宗恩については三浦綾子さんの『利休とその妻たち』が分かり易いかも知れませんね。